

企業の成長

今井久登

1. はじめに

消費税増税に端を発する長引く不況の中で企業も人々も元気が出ない状況である。大学の学生も就職や自分たちの将来について不安感を持っている。

そこで本稿では企業の成長とは何かということを考えてみたい。そして少しでも元気を取り戻したい。筆者は Penrose (1959) をたたき台にして考えていく。

なお、Penrose (1959) に関説する著作として末松 (1961)、瀧澤 (1973) がある。

2. 企業をどう見るか

企業についてはさまざまな見方がある。

経済学では企業を生産関数と見る。生産関数とは製品の量と生産要素の量の関係である。

経営学では企業を管理組織と見る。Chester Barnard の考え方が代表的である。

Penrose (1959) は企業を経営資源の集まりと見る。経営資源の中で重要なのは人材であり、技術と経営のノウハウである。本稿では Penrose (1959) の見方にしたがって企業の成長について考えていく。

なお、筆者 (1998) は近年の経済学の見方を示した。

3. 起業家の役割

企業の成長はその事業領域 (domain) によって制約される。

起業家 (entrepreneur) の役割は企業の事業領域を開拓することである。

起業家にはどのような資質が求められるのか。Penrose (1959) によれば次の4つのことがある。

機敏であること。(versatility)

資金を調達できること。(fund-raising ingenuity)

展望をもつこと。(ambition)

状況を的確に判断すること。(judgment)

豊橋創造大学は起業家の育成を基本理念としているが、～の資質を得るためには積極的な勉学態度が望まれる。なお、Penrose(1959)は事業領域のことを生産機会(productive opportunity)といている。

4. 経営者の能力

経営者は不確実な状況の中で様々な意思決定をする。

企業の成長は経営者の能力によって制約される。それでは経営者の能力を拡大するためにはどうしたらよいか。次のことが考えられる。

経営者の数を増やす。

外部から優れた経営者を呼んでくる。

内部で経営者となる人材を育成する。

特に～は企業にとって重要な課題である。

5. 拡張の方向

ここではPenrose(1959)にしたがって企業を経営資源の集まりと見る。

経営資源の蓄積が技術革新を生み出す。それは多様な人的物的資源が相互作用することによって生じる。この技術革新が企業の新たな需要を開拓する。

つまり、企業の拡張の方向は経営資源の蓄積によって決まる。

6. 規模と成長の経済

規模の経済とは製品を多く作ると安くできることである。これは企業が今もっている技術と経営のノウハウを同じ事業領域で使えることによる。

これに対して成長の経済とは製品の量と種類を増やすと安くできることである。これは経営資源の蓄積による技術革新によって企業のノウハウを複数の事業領域で使えることによる。

成長はプロセスであり、規模は状態である。

7. 多角化

多角化とは事業領域を増やすことである。

企業が多角化しようとするのは次の理由による。

技術革新による成長の経済を生かす。

ライバル企業に対抗する。

需要の変動や減少に対処する。

企業の成長を実現する。

多角化の手段には新規投資と買収・合併がある。

8. 買収・合併

買収とは企業の所有権を移転することであり,合併とは所有権を統一することである。

買収・合併が行われるのは対象となる企業がもつ経営資源,特に人材とノウハウが評価されるからである。武石・延岡(1998)によればダイムラーとクライスラーは環境保全技術を開発するために合併した。また,多角化のために買収・合併が行われることもある。

9. 企業の成長率

企業が成長するのに必要な経営資源はどんどん大きくなる。
これに対して企業の成長に使える経営資源は限られている。
それで企業の成長率はある規模から減少していく。
この規模と成長率の関係を Penrose 曲線という。

10. 中小企業の役割

中小企業は産業の中で重要な役割を果たしている。
その一つの役割として新しい事業領域の開拓がある。
黒瀬(1997)によると1990年代の成長企業は市場創造型中小企業である。そこでは市場のつぎやき(interstice, niche)を聞くことが大切である。

11. むすび

本稿では Penrose(1959)をもとに企業の成長について考えてきた。
結局,企業の成長とはそこで働く人間の成長に他ならない。
ところが自由放任の産業・教育政策が空洞化をもたらしている。そこで下請企業も子供も親から自立しなければならない。企業家精神をもって新しい事業領域を開拓しなければならない。その一つの方向としてリサイクル技術の開発がある。環境保全は企業の社会的責任であるとともに大学の研究課題でもある。

12. 補論

企業の成長や行動を解明するためにはその構成要素である人間の行動を見なければならない。

人間の行動をモデル化する手法として ORのような最適化行動モデル, ゲームの理論,

シミュレーション・モデル , などがある . これらはいわゆる経済原理を前提として展開されることが多い . しかし , むしろ種の保存 , 展開という観点からこれらを見直す必要がある .

引用文献

今井久登 1998 , 「企業とは何か」 , 『豊橋創造大学紀要』2 .

黒瀬直宏 1997 , 「市場創造型中小企業の可能性」日本中小企業学会編 , 『インターネット時代と中小企業』同友館 .

Penrose, E. 1959, The Theory of the Growth of the Firm, Oxford University Press.

末松玄六 1961 , 『中小企業成長論』ダイヤモンド社 .

武石彰・延岡健太郎 1998 , 「世紀のゲームの時代を迎えた自動車産業」経済セミナー : 525 .

瀧澤菊太郎 1973 , 『高度成長と企業成長』東洋経済新報社 .